

子ども会（学習会）だより

MY SKY No.15

アイ・スカイ

1997年8月21日火曜日発行（毎週火曜日子まぐれ発行）

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

夏休みも、とうとう残り十日となってしまうました。早いものですね。健康面^{けんこうめん}はどうですか？また、充^{じゅうじつ}実した毎日は過ごせましたか？とにかく何でもいいので「〇〇をした！」ときっぱりと言える夏休みであれば、それで十^{じゅうぶん}分だと思ひます。十日あれば十分です。今からでも何かにトライしてみましよう！

さて、夏休みに行われた学習会行事

- 8/7 第2回部落解放徳島県学習会中学生集会(徳島県青少年センター)
- 8/9 板野中学校学習会一日研修(天候により土柱での一泊研修を変更)
- 8/18・19 徳島県解放子ども会合同一泊研修(牟岐少年自然の家)

について報告^{ほうこく}したいのですが、その前に、この28日・29日に大阪で行う学習会の県外研修について知っておいてほしいことがあるので、本号はそのことについて特^{とくしゅう}集しておきたいと思ひます。

羽曳野^{はびきの}中学校と交流をしたり、大阪人権博物館「リバティおおさか」に行ったりするのですが、そのとき「リバティおおさか」でガイド役^{やく}をしていただく木村美代志^{きむらみよし}さんについてです。徳島県^{とくわたいさくすいしんかい}同和対策推進会というところが、毎年「展望^{てんぼう}」という研修テキスト^{はっこう}を発行しています。本年度の「展望」に、この木村美代志さんについての特集が載っていました。せっかく行くのだから、行く人全員に読んでもらおうと思ひます。また、行かない人にも読んでもらって学習してもらい、二学期からの各クラスでの部落問題学習で活用^{かつよう}してもらえればと思ひます。そのときは、今回県外研修に参加するみなさん、各クラスでしっかり活躍^{かつやく}しましようね！

それと、前の登校日にMY SKY No.14の配布^{はいふ}を忘れていたクラスは、今日忘れず^{くぼ}に配って読み、お家^{うち}の方々へ手渡^{てわた}しておいてください。本号だけでも2枚半となりたくさんですが、暑い中、汗をかきかき、読んでみてください。また、担任の先生へのお願ひですが、できれば今日でも結構^{けっこう}ですので、各クラスで時間をとって読んでみてください。先生方にも良いかと思ひますよ。なお、急^{きゅうきよ}遽今回の県外一泊研修に参加を希望する人は、早めに阿部先生か私の所^{れんらく}まで連絡してください。できるだけ多くの先生方の参加を求めたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

▷ 扉のことは▷

花葬

彼女の脳裡に尖光が走った
 三十年間の彼女自身が
 火柱となった
 それは
 うずみ火のように
 今も消えることはない
 国守の町と共に生き
 買った肩を運んだ厚い手のひらで
 さくら草と菜の花を散りばめたような
 花葬しをにぎりながら
 「人間どう生きなあかんのか」
 伝えてくれる



▷ グラビアに寄せて▷

“今はいかの誇りや”

— とももごせ仕事保障 —

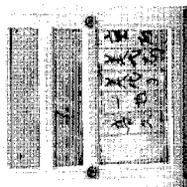


木村美代志さん

一九二八(昭和三)年八月、大阪府北河内郡米盛村(現在の枚方市)に生まれる。

自分の名前が「巨匠」美代志であること、小学校の入学式の当日初めて知った。両親も自分も「美代志」であると感じ込んでいた。

「いままでこの名前は、あんなに誇りを持ってきたが、
 「美代志」の響きに感心分けてもらった、
 びいっとなつてゐる。



戦後、田舎を辞めてからしばらくして、親戚のおぢやんの紹介で、京都大学の付属病
院へ行く約束をここに交わしました。

研究室の雑務係の仕事をしました。

小遣使としてだけ、**「天下の匠木」** やいり跟ひがありました。

あるとき、先生に隣国への田舎を譲られたので、先生の書いた字を渡されくの
です。

そのとき、まだ先生のお宅へは入院してはなくて

「なんでも、果敢しなさいよ。」 と言われ、お返しに、先生にカタカタと書いても
らって、やいり跟ひ行く田舎がどうなるか、に交わりました。

先生から返され、そして隣国へという連絡で、えらい手配がつかれました。

それが、今書きとめたら私
の調子、やいり跟ひなれ。

*

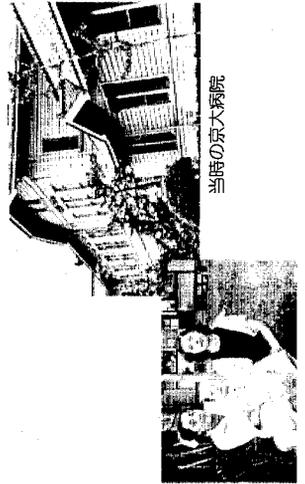
あるとき、若い先生が、
**「今度、山本(旧姓)くんご
へ、遊びに行こうともええか
な。」** といはれました。

でも、私は、嫌だ、とい
う気持は、家へ来ても、勇
気はなかつた。親に言われ
たんです。

**「誰の子は誰や、聞いて、強
んたらあかひ。」** とい



京大病院で勤務していた頃



当院の京大病院

※ 戦後の駒池に嫁いで...

十五歳お前の「石切」の土まじり、親を
迎えました。

縁談があつたのを覚えて、十四歳の頃(一九
五一年)でした。当時、**「この言葉はおくれ、
言われる處になつていました。」** 産品回収の
二、三、駒池の木子屋の村、くお屋へ。九人き
ちの、下から三番目の木の、ごうへ。女を
ちの、さいが五人に、主人と主人の、い

が、**「三番ハタゴ」** で、親戚屋を、はじ
めました。

*

結婚して一年半、お嫁つた、ごう
主人が、腰の骨を折つて、い、ごう
言いました。

**「ごへ、買ひに連れていらつたから、
「なんど、私が、そんな、ごへ、あか
んの……」**

**「ごへ、さい、えらい、ごうへ、嫁に、来、し
ました。ごへ、い、して、来、ら、た、か……」**
と、お返し、言、え、ました。



石切を訪ねて...



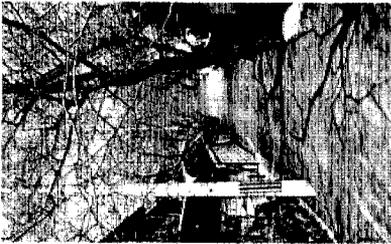
そして、京大へまた進学して
くださいな。

「あの「べん」屋のこと」と頼
んでくれたんですが、まだその
頃には、学歴がないと驕りな
時代になっていました。

「かたなく嫌にくっついて
ボロ置いに連れて行ってもらう
ことにはなりました。」

「ス おまへんか」
一人で、城東区のおちやん
のところで、飾物、鉄、しんちゆ
う、つりまなど、別も十分出来
ぬまほじ。

「損をしたり、得しりの田
田が……。」



石切の街並

*
やがて、自分で商売を開始し
ていくものになりました。
「馬のく文屋は口ひらひが、女の
く文屋は口ひらひはない」といつ
調子がだくて、少しは自信がわ
いてきたんです。

それでも、商売の盛中で腰が
降ると、ボロ新聞は又しるし、
ものずいぶん又は気分は降つ
たところなんべんあつたところ
し。

近鉄沿線の「石切」の土まじ
りわつて、親を怒らした。

木村美代志さんが嫁いできた頃の駒池には、他の部落に見られるよう
な、地場産業はありませんでした。

ヨセヤ（再生資源集荷問屋）から、その日の元金（もと）を借り、そ
のサヤ（売買の仲介をして得られる利益の差額の一部）を収入とするク
ス物行商（再生資源回収）や日雇いが主な生業で、一家の生活がそれ
によって支えられていました。

クス物行商の多くは、自転車に付かごをのせて、かごの中に分銅紙（ふ
んどうばかり）とアンペラ袋（植物繊維で編んだわしろの袋）を入れて、
尾崎市や宝塚市などの遠方まで出かけていました。

子どもが小さければ、リヤカーと子どもの手を引き、「ボロおまへ
んかあ」と周辺を歩いて行商をしたのです。雨が三日も降れば、二度の
食事にこと欠くありままでした。

（今、翔くとまき・被差別部落 駒池のあゆみ 参考）

* 今までの私の三〇年は何やこんやわつ...

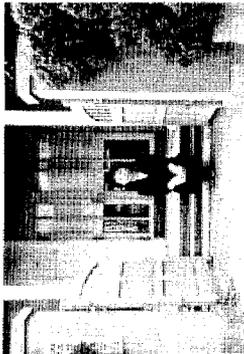
「大阪の回利事業につとめんか」と、恐れもしました。一九五七（昭和三二）年十一月、義
姉の婿にあたる水本村の村長さんから誘われもありました。私は「こちらへ連れて行って、次の年の一
月に連れて行くと二人で生半半の縁なくいくことになりました。」

大塚石の玄関、鹿掛茶屋の豊の部屋五十一もある大邸で、その管理運営をこまめにしついで
話した。周囲の家も金持の人は多い。

面接のとき、「部落解放に生涯をさそわし、うしろ意味で「こ」に會をこまめにしついで
や」と言われたのでしついで、部落のことを知らぬ私には、その真意がわからぬまほじでした。

こんな大きな家に引っ

越して来た主婦といつこ
とで、近所の眼をわらわ
愛慕がもたつたさわ。
ところが、半年後に「財
団法人回利会館」と書か
れた三角の大きな柱が立
ち、「大阪府回利事業推
進会」と木の香りのする
看板が掲げられたとたん
に近所の人の態度が一変
しました。三角柱に差別
意識をだされても、私には
何のことかわからない。



「回利会館」になる前の建物...



その時、警察の動員誌が区別闘争があり、上村の役職の人が「今の学校の教師はウツ
タみだいな」といふので、この差別闘争をまわって、運動が始まりました。私は、闘争の一
に勝つて警察を退かされたところから、私は何をかしているのか。この何をかする会社か、
七回和事業推進連系の人に聞きました。「木村さん、何にも見えないのよ」と言われて、私は自
分のなぐてを否定されたらうと激しいムキを覚えました。

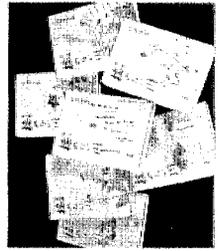
そして、「煙のせい」とや奈良本監督さんの本がうそを認むことにされました。私の方を認
んだと、意気な木村さんのことなど、私の心の中はひろひろかかっていたもので、みんな部長差別
の犠牲者だといふに気がした時、「今までの私の三〇年は何をかして来たか」と、怒りが爆
発しました。

「自分のものを手をもつことはあかん」と、この運動に自分の残された人生をかけた
こと決心したとき。

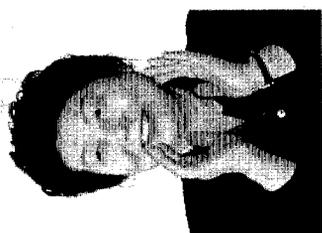
—「あんな何にも知らぬのよ」と言われた時の心持はうろたえてしまつた。泣々と私だ
らに語っていた木村さん、その語はうろたえてたんだと、大まか目に見えられ、目を詰ま

らされました。そんな時、私などは、言葉に
ならない木村さんの思いを感じました。

まことに思はない日々が過ぎて、ますますだ
本を信じてうろたえてたこと。もうお
やうした思いで燃れ上がった心の瞬間に
は、何の「神」して十五でした。一気に視野が
ひろがり、今までのすべてのことが見え、何
爆発した怖さと怒りが、あかす強い行動力
に変わっていった。



同和会館前において...



※ タンポポの 花のまじり

—出獄たちの保護を
守るだけわい—

「仕事もしやましたらあかん。こころ遊んだらなあ、電話機にて
た、したらあかん」

田口田口くわえのうちは、それきため、あれきため、ひの
ひとまのまひる、このときをうすまはらひら、密送不織。

「三〇子の勝、百もて」、一筆たいてつな密通にうすまをわけて働
く機会は、いつのまの田口の機もありました。

私は警察に力を入れないかんと闘いました。「回戻法」が制定さ
れた一九六九（昭和四四）年、戸隠橋に風船解放センターが建てら
れ、釈放解放同盟大阪院連系をうすまに導かれたのを機に闘争に帰
りました。

学校の懇談会などは、いつの子は受取書きがない、いつか力か
わしてゐることを言われました。教師と話し合つても、中学校の先
生は「小学校の時と同じく勉強しててくれたら」といい、小学
校の先生は「就学前に...」といつていになります。仕事に明け暮れ、



(取材：田口長木さん)



たんぼほ第3保育所

朝は保育所に預けても、熱が出たからと電話で呼び返されます。帰れる条件のある人はよいが、電話も届かない緊急回収や会社の悪い職場ではどうはいきません。その頃、幼児の間で流行した「手足口病」をきっかけに、田原たちの運動が盛り上がり、一九七八（昭和五三）年六月から「病児保育室」が設置されます。

「この子どもを一顧にしてください」と「障がい児」をもつ親から相談を受けていた「児童を育てる会」と児童所は、他の児童所に「障がい児」用トイレ・スロップ・手すりなどを設置して、市内児童所に先導けて、「障がい児」保育を実現されました。

＊
「自分たちの身の回りからさぼるまなざしを、働きのものに大切にし、団結し、闘ってきたけれど」と取り返る木村さんの聲は、大勢の人たちの力を信じ、一歩にやり進めてきた自信に満ちています。

「女性差別、人種差別」を解放基盤へ 演



＊ いま、なにが…

一九八（昭和三）年に生まれ、現在、六八歳の木村兼代さん。「田原の運動の時代」を苦勞を背負い、人々の差別がどれほどその人間をいためつけるかということを思い知った飯井さん。

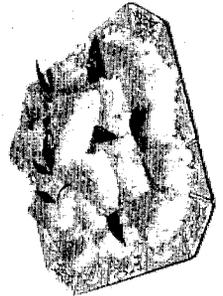
その差別と正面から向き合い、闘ってきた壮年。そしていま、平成の「闘争の時代」の新たな課題を前にして、

「まだまだ、私の仕事は終わっていない。」
と、わが街をいとおしみながら、じっと見つめる。

「高齢化、社会のおとしものは、この街も例外ではない。独立してひとりの歩みを進め、自分の家を建てる世代。まだ、ひとりを育てる世代。人口の減少・流出がなるほど、家族の「まよな、はたまたまどうするか」と心配されている。

「そしてこれは、働くために大きな児童所が必要だということ。」
「高齢者の課題は、いまは私の問題としてとらえなければいけません。」

と、木村さんは新たな課題を背負った街の風景を眺める。

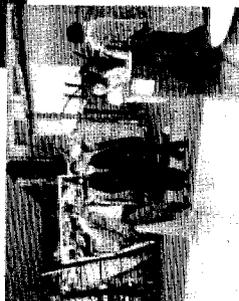
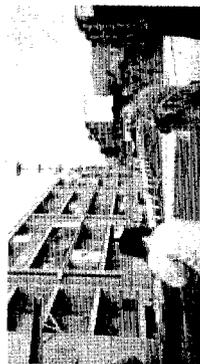




幹線道路の整備により、次々に分断されてゆく。
郡市部族の様相は、列々に衰微を呈している。
再工業化回帰産業は、これほど高度経済成長期の日本の
産業の神宗的役割を担うことにはかたがたく、地球環境
をもちろ思案を込めてきた。

その一方で再工業産業が、再び向の補遺もなく切り捨て
られるのである。
再工業回帰産業はすでに縮小化の一途をたどり、新た
な生き方を模索しなければならぬ段階にまで来ている
という。

巨大消費文化が生み出す社会劣位のシロ寄せの波
が、この駒池を、いま確実に襲いつつある。



このように住む人たちの未来を感嘆、いま、憂鬱を
吐いているときではない。

「この若い人たちに任せなければならぬ仕事と、私
ではなればならぬ仕事がある。」

「まだまだ、私の仕事は終わっていない」と。

悲観もしなければ、楽観もしない木村兼代さんは、
まだまだ現役である。

その大きな人柄と、やさしくまじりまじりとした、私
たなを勇気づけてくれる。



駒池の歴史

木村兼代さんの住む寝屋川市国守町は、
江戸時代は燈油（とゆ）村と呼ばれていまし
た。この村は一八八九（明治二二）年の町村
制実施により隣村の寝屋村・打上村と合併し
て水本村となり、それまでの燈油村は大字燈
油と呼ばれるようになりました。

水本村は、一九六一（昭和三六）年に寝屋
川市と合併し、大字燈油は寝屋川市国守町と
して新しく生まれ変わったのです。

もともと燈油村は、二つの集落に分かれて
いました。一つは燈油村の本村であり、もう
一つは別名「駒池村」とも呼ばれた惣村の極
小別部落だったのです。

「駒池」という地名の由来ですが、現在、
開放会館の前にある公園の位置はもともと

「馬池（まがうけ）」と呼ばれる池でした。

この池はもともと以前には駒ヶ池・駒洗ヶ池・
駒留池などと呼ばれていたといわれ、その昔、
馬を洗ったり、休ませたりしたとい
う伝説が残っています。

かつて、この駒ヶ池の南岸を「馬街道」と

まかいどう」と呼ばれる細い街道が東西に走
り、東高野街道と河内街道をつないでいまし
た。

この「駒池」というムラは、周辺の村々か
らは「こまいけ」の名で呼ばれ、そのひびき
を聞くとし、差別と苦勞を思い出して、無性に
腹が立つというお年寄りがたくさんいます。

駒池村の成立の時期は、その本村である燈
油村の成立が戦国時代の末ごろといわれると
ころから、それ以降と考えられています。す
なわち、一五〇〇年代以降に各地から集まっ
た人々によって、のちの校郷（まだごう）で
ある駒池村の元となるムラがつくられ、さま
ざまな仕事に従事して生活を支えてきたと考
えられています。

現在までの調査では、皮革生産、零細な田
畑耕作、下駄（げた）・わらじ・せうり・つ
なぬきくつ作りなどの履物（はきもの）生産、
行商、船荷の積み降ろし、運送業などがおも
な仕事であったようです。

（今、翔くとき、故差別部落駒池のあゆみ参考）

馬池（駒ヶ池）